

## 宮古支部

伊東 喜幸  
支部長

組合員	252人
管轄エリア	宮古市、山田町、岩泉町、田野畑村 担当：JP 総合研究所 山寺 博丸

——3月11日の地震・津波発生時の状況を教えて下さい。

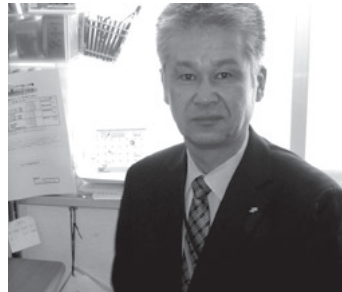
震災発生時は渉外担当ですので、営業活動をしていました。海沿いの地区にある酒屋さんを訪問していました。地震発生と同時にお店のご主人ととっさにケース棚を押さえていました。しかし、あまりにも揺れが激しくてとても押さえきれず、ご主人と一緒に外に逃れました。乗ってきたバイクは倒れてしまい、ヘルメットは遠くの方まで転がっていました。

電柱は左右に揺れて、電線は大きく波打っていました。揺れが収まるまでその場におり、揺れが収まってから高台の国道へ上がって行きました。ただ宮古郵便局に戻るには、宮古湾沿いの街中に下るしかないので、やむをえず、街中を通り局へと戻りました。

この間の時間軸は、国道に上がったのが3時くらいでしたか。宮古郵便局に着いたのが3時5分頃でしょうか。

津波が来たのは場所によって違いがありますが、3時20分から3時30分くらいですね。

時間的に余裕があったように見えますが、訪問していた酒屋さんも津波で跡形もなく流されてしまったので、もう少し早く



伊東喜幸支部長

津波が来ていたら自分もアウトかなと怖くなりました。当初私が訪問していた地区は8、9割方の家屋が流されましたし、局へ戻る途中の地区も甚大な被害を受けました。

——地震発生後、すぐに状況を把握することはできましたか。また、地震や津波に関する情報は、いつ頃どのような形で入りましたか。

なかなか携帯がつながる状況ではなかったのですが、たまたま、社員が見ていたワンセグのニュースで宮古での津波の状況が映し出され、これは大ごとだとみんなが認識し始めました。それ以降は停電のために、地元にながら地元の被害がどのくらいなのか全く把握することができませんでした。

津波は宮古郵便局の手前で止まり、津波の直接的な被災は免れましたが局の前まで畳などが流されてきました。

震災当日は自宅に帰れない社員や市民の皆さんの何人かは局舎内に泊まることになりました。その後、数日は社員が局舎に泊まらざるを得ませんでした。

また、停電でセキュリティ機能が失われたこともあり、支店長をはじめ管理者も寝泊まりすることになりました。

——震災後に業務を再開するまでどの程度かかりましたか。

通信手段が全く使えないために、運送便の運行状況がしばらくの間分からない状況が続きました。支店では翌日の土曜日は自宅待機。日曜日に震災当日配達不能とな

っていた郵便物、ゆうパック等を津波の被害を受けなかった地域に配達をしました。その後、市役所から避難所リストの提供を受けて避難所別リストの作成に取りかかりました。また、避難所に臨時ポストを設置し、無料はがきの配布の準備等の様々な対応を行いました。

局会社は、停電が続いていたので非常払いくらいしか当初はできませんでした。被災した局の社員は宮古局あるいは被災していない近隣局へ兼務という形で配属されました。局会社では震災後の何日間かは勤務時間途中で帰宅して良いとの指示がありました。

ちなみに、水道の復旧は震災4日後、通電は4月8日、固定電話の復旧が一番遅かったですね。

——仕事の再開にあたって苦労されたことは何でしょうか。

まず、ガソリンが無いことです。宮古支店は盛岡支店からの携行缶による配給を受けました。しばらくしてから、宮古市から緊急車両の指定を受けて何とか確保できたという状況でした。

大変だったのは、ガレキがまだ散乱している状況での集配作業でしたので、パンクがしょっちゅうありました。また、埃がひどくてマスクは必需品だったのですが、売り切れでしばらくは手に入らない状況が続いて困りました。

局会社では、近隣の金融機関がまともに営業できない状況でしたので、かなりの忙しさでした。お客様が外まで並び、椅子も



津波で流された鉾ヶ崎郵便局は仮設で営業

用意しました。ロビーが混雑して混乱しますので、入場制限をせざるを得ませんでした。また、渉外社員は営業どころではない期間は駐車場係や来局されるお客様対応、また、被災した局へ出向き、ガレキや泥などの撤去作業やら、ガソリンの確保に奔走しました。

——仕事を再開して感じたことはありますか。

お客様は本当に郵便局を頼りにしているんだなと実感をしました。そうはいっても、体制が万全ではない時は様々なご迷惑をおかけしたことが多々あったように思います。

通帳や印鑑、証明書等を流されたお客様、現金を持ち合わせていないお客様、当然、ご家族を亡くされたお客様もいます。そうした中で、全ての社員が、その時々において一生懸命に業務を行ったと感じています。このことは必ずや将来、社員一人ひとりにとって大きな財産になると確信していますし、お客様第一と考え、プロとしての意地と誇りがあった故の業務運行だったと



津波でほとんどの家屋が流された雪の被災地

思います。

——JP 労組の支援物資が届いたのはいつ頃でしたか。また、震災発生当初、最も必要とされたものは何でしょうか。

3月の下旬頃から集まりだしたように記憶しています。震災当初、必要だったのはガソリンでした。業務上も必要ですが、日常生活の買い物あるいは安否の確認等でガソリンが無くては全く身動きがとれませんでした。

生活用品、食料品も当然に必要でした。特に食料品については、支援物資が届いてすぐに無くなるような状況でした。

——震災による宮古支部の被災状況を教えてください。

ご家族を亡くされた組合員は8人、全壊した組合員の住宅は33件、半壊が3件、床上浸水が6件、床下浸水が1件でした。被災した局舎は9局です。

支部の組合員全員の被災状況が全て把握

できるまで1週間くらいかかりました。

——緊急時の連絡体制は日頃から確立されていたか。

震災前日に県内局長の会議があり、当日は休暇の局長が多数いて、社員のみ出勤の局舎がかなりありました。今思えば良く社員の判断で避難したと思います。連絡体制は周知されていたのかもしれませんが、徹底されていたか疑問ですし、あつ

たとしても携帯をはじめとして通信手段が不通のため、機能しなかったでしょうね。

——宮古支部では組合員の皆さんにどのような支援をされていますか。

震災当初と言いますか、3ヶ月くらいは支部本来の活動は、ほぼストップした状態でした。とにかく地域のため、お客様のためという考えのもとで業務を最優先させました。共済関係、義援金関係の周知集約報告くらいしかできませんでした。

一時期、メンタル面で相当参っている組合員もいました。組合員の家族も身内を亡くし、家を失った喪失感を抱えています。これからは家族も含めてメンタルヘルスケア、「こころ」の問題をどうすべきかを考えていくべきだと思います。

——震災後の支援として、労働組合はこういったことも出来るのではないかと感じたことはありますか。

震災当初は通信手段が不通だったことも

ありますが、支援物資について優先的に何が一番必要かという見極めが大事だと思います。

また、組織だけではなく被災地域にとって何が必要か、そこにどう支援していくかを被災地支部である私たちも含めて考え、具体的な地域支援をしていくことが重要だと思います。それには普段から地域での声かけを継続していく事や福祉型労働運動との連携も必要で

しょう。仮設住宅は避難している人にとって「圧迫感」もあります。お年寄りは一日中引きこもりになりがちなので、居場所を作ったり、声をかけていくことは大切です。ここは被災地としては市街区域がある程度残ったことも大きいと思います。

——震災後、労働組合として緊急時の体制などで改善した点やその他、何かあれば教えてください。

組織としても会社としても当然ですが、人命が最優先であるということをもとに、第一に考えなくてはなりません。会社側とのなお一層の議論、交渉を強く望みます。

全国の支社、支店の皆さんに業務応援をしていただきました。おかげさまで地域のお客様への対応についても何とか乗り切ることができました。感謝申し上げます。

——最後に、全国の仲間の皆さんにメッセージをお願いします。

支部内の町並みは今も戻っていません。



10メートルの高さの田老の防潮堤でも津波は乗り越えてきた

多くの家屋が流され、壊されたりして撤去され、元の風景ではありませんし、集落によっては全ての家屋が流されたところもあります。復旧・復興はまだまだ先だと思います。ガレキはなくなり、きれいにはなりましたが、これからそれらの場所がどうなるかもわかりません。

住居という「ハード」の面もしかしりますが、「ソフト」の面、「こころ」のケアなど多くの課題が残されています。

真の復興をめざして私たちが組織として何ができるのか、何をしていかななくてはならないのか、地域の皆さんにとって何が本当の幸せなのかを議論していく必要があると思います。

震災から1年、この間、全国の皆さんからの温かいご支援、心強い励ましをいただきましたことに心より感謝を申し上げます。ありがとうございます。

JP 労組としても様々な課題を抱えていますが、ともに頑張りましょう。

(2012年3月1日取材)